

氏名 (本籍)	正 村 一 人 (岐阜県)
学 位 の 種 類	博 士 (医学)
学位授与番号	乙 第 1096 号
学位授与日付	平成 9 年 1 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	高齢者の主観的咀嚼満足と残存歯数および健康観との関連性
審 査 委 員	(主査) 教授 岩 田 弘 敏 (副査) 教授 清 水 弘 之 教授 立 松 憲 親

## 論 文 内 容 の 要 旨

咀嚼機能の維持は高齢者のQuality of life (QOL) の向上には不可欠な因子の一つであり、心身の健康保持における口腔保健の重要性が徐々に認識されつつある。

ところが、急速な人口の高齢化にもかかわらず、高齢者の歯科実態、咀嚼満足、健康状態などの相互関連性は、いまだ十分に理解されていない。このため、高齢者の増加とともに歯科領域と他の保健医療活動との連携や、相互の関心を喚起することが重要と考えられる。

そこで本研究で申請者らは高齢者の歯科実態（残存歯数、欠損補綴状態、および歯の部位別残存率）を調査し、主観的咀嚼満足感（以下、咀嚼満足）と残存歯数の関連性、さらに咀嚼満足が健康観にどのような影響を与えているかを検討した。

### 対象と方法

岐阜県西部T町の満65歳以上の住民1,275人を対象とした基本健康診査に歯科検診と健康観（生活リズム、体力、健康状態、疲労感など）に関する自記式保健調査を加えて実施した。受診率は40.5%で、記入不備の3人を除く513人（男245人、平均年齢71.6歳、女268人、平均年齢70.7歳）を分析対象とした。

#### 1. 歯科実態調査

各個人ごとに健全歯数に処置歯数と未処置歯数を加えて残存歯数とし、性・年齢階層別に平均残存歯数を求め、男女間で比較した。

また、咀嚼満足と残存歯数の関連性を検討するために対象者を残存歯数を指標として8群に分類した。このなかで、上下無歯顎の者は一つの群とした。残存歯数および咀嚼に満足している者の割合に性差が認められなかったため、以下の検討は男女を分けずに行った。

欠損補綴状態はブリッジ（架工義歯）、有床義歯（可撤式義歯）、ブリッジと有床義歯の両方あるいはどちらか一方（欠損補綴者）、および上下顎総義歯のそれぞれの年齢階層別装着者を集計した。

さらに年齢階層別に歯の部位別残存率を算出し、対象者数および比較的残存歯の多い前期高齢者65～69歳の群で詳細に検討した。

咀嚼満足状況は咀嚼満足者群と咀嚼不満足者群の2群に分類した。

#### 2. 健康観に関わる指標

生活リズムの評価は規則正しい生活をしているか否か、主観的体力は体力があるか否か、健康状態は健康と感じているか否か、主観的疲労感は疲れやすいと感じているか否かのそれぞれ2群に分類した。

以上のデータより咀嚼満足と健康観に関わる指標および残存歯数との関連性について検討した。

### 結果と考察

#### 1. 残存歯数および欠損補綴者の実態

全対象者の平均残存歯数は12.7歯（男12.9歯、女12.5歯）で男女差は認められなかった。しかし、80歳以上では女性が男性に比し残存歯数が有意に少なかった。いわゆる8020運動に対応する残存歯数が20歯以上の者は65～69歳の43.8%から年齢とともに急速に減少し80歳以上では4.7%にすぎなかった。また、なんらかの欠損補綴をしている者の割合は全対象者の88.4%で、有床義歯装着者は77.2%、上下顎総義歯装着者は18.1%であった。

## 2. 歯の部位別残存率

65～69歳の群（256人）における下顎第一大臼歯の残存率は、左34.4%、右33.6%で、3人に2人が咬合力の中心的役割を担う下顎第一大臼歯のすくなくとも片方を喪失していた。

## 3. 咀嚼満足

咀嚼満足者は男204人（83.3%）、女231人（86.2%）で、性・年齢階層間に有意差は認められなかった。

## 4. 健康観に関わる指標

513人中、規則正しい生活をしている者は439人（85.6%）、主観的体力のある者は392人（76.4%）、健康と感じている者は396人（77.2%）、疲れやすいと感じている者は239人（46.6%）であった。なお、各々の質問回答において年齢階層間に有意差はなかった。

## 5. 咀嚼満足と健康観に関わる指標との関連

咀嚼満足と主観的体力との間に正の関連（ $P<0.05$ ）を、咀嚼満足と疲労感との間に負の関連（ $P<0.05$ ）を認めた。

## 6. 残存歯数と咀嚼満足の関係

残存歯数が0～8歯と17歯以上の群で咀嚼満足者率が高く（81.3%～93.7%）、9～16歯の群では有意に咀嚼満足者率は低かった（72.9%～73.0%）。その結果、咀嚼満足者率は残存歯数に対してU-shaped curveを描いた。多数歯残存者は咬合力をともなった咀嚼満足であり、一方の多数歯欠損者の咀嚼満足は適切な欠損補綴と加齢経過のなかで衰退的变化に無理なく適応した結果得られたもので両者間では満足感の質が異なると考えられる。これに対して9～16歯残存者に不満が多いのは臼歯部の良好な対咬関係が得られず、過去の満足感と現状が葛藤する過渡期ととらえることができる。

以上の結果から咀嚼満足は残存歯数に左右されるのみでなく健康観にも影響することが考えられた。加えて、高齢者のQOLの確保には三次予防（補綴）中心の歯科医療のみならず歯牙萌出期からの長期にわたる一次、二次予防を中心とした歯科保健への早期からの対応の必要性が示され、高齢者の保健活動における歯科領域の重要性を明らかにした。

## 論文審査の結果の要旨

申請者 正村一人は高齢者の咀嚼満足と残存歯数、健康観の関係を検討し、咀嚼満足は残存歯数により変化し、あわせて健康観に影響することを示した。この研究は咀嚼満足が高齢者のQOLの向上に重要な役割を担うことを明らかにしたもので、予防医学および口腔衛生上、価値あるものと認める。

### 【主論文公表誌】

高齢者の主観的咀嚼満足と残存歯数および健康観との関連性

平成8年9月発行 日本公衆衛生雑誌 43（9）：835～843